

旅の風景

出会い、ふれあい、発見...
彩とりどりの旅の調べを綴りました。

秋の国東日記より

二任生活者の手記
風の会会員 青木 弘

9月末、マンジュシヤゲとコスモスの花咲く古里に戻りました。高校の創立80周年式典に参加し、妖しげな祭り・ケベスで火の粉をかぶり体を清めてもらいました。



10月某日、メタセコイアの先端を切りました。四十数年前にオヤジが植えた「生きた化石」は20メートルに達し、庭にはクスノキが太い枝を突き出し屋根根にかぶさっています。枯れ枝や落葉は家の春

命を短くします。杜をねぐらとする鳥たちには申しわけないが、屋根の劣化をふせぐには我慢してもらわなければなりません。その数日前に屋根の一部に風対策のネットを張ってもらいましたが、これらの作業で家はこれほど寿命が延びるのか。せめてあと20年ぐらいは雨漏りしないことを願うのみです。

開扉裏からゆらゆら天井に抜けてゆく煙を見ていると昼間に見た小学校の運動会の光景が蘇ってきました。苦手だった徒競走、転落して失



秋の夜長はほとんど独り。町の図書館で借りてきた絵本などを読んでいました。「葉っぱのフレディ」(原作レオ・D・バスカリーア)は、かえでの若葉フレディが様々な疑問や不安を抱きながら、紅葉し、枯れて散り、やがて新しい木を育てる力となるいのちの物語です。インド人の人生観に因住期思想があります。学生(へく)しよう一期、家住(かじゅう)一期を経て、俗世に半分、森に入って瞑想の生活を送る期間は林住(りんじゅう)一期というふうです。

神したような気がする騎馬戦。ぐるぐる50数年前のひ弱な時期に記憶がさかのぼります。どうやら英ちゃん(巻頭エッセーの筆者)差し入れの焼酎が効いてきたようです。

人生のしめくくりとして世俗で得たものを捨て、水瓶と杖と布一枚を持って巡礼行脚して果てる遊行(ゆきよう)期が最後になるのですが、解脱するにはいって勉強不足。大阪・大分の二任生活はまだまだ続きそうです。

井上勝美邸 一泊二日の旅

井上勝美邸 一泊二日の旅

9月中旬、岡山県と広島県の県境に位置する自然一杯の場所へ、一泊二日のツアーを楽しんできました。



参加メンバーは40歳~80歳までの老若男女。週一回のヨーガ教室に通う生徒たちです。

この写真では日頃の成果を示す場面がありませんが、2名のポーズは、その片りんを表しています。

一番楽しい時間は、ヨーガの練習と言いたいところですが、宮本義夫さんの手作りの料理を囲み、大いに語り合う時間だったようです。

◆皆様の旅の風景を募集いたします。800字程度、締め切りはございません。

和の問題は難しい永遠のテーマである。因みに、開発出資は、日系商社のほか韓国系、中国系資本とのこと。

(河本雪夫)

南半球一周船旅日記

第4回目

ブルネイを後にして、南シナ海を南下、赤道直下のシンガポールを目指し1300キロを3日かけて航海する。デッキで潮風を受けて寛いでいる時、船のゴミ処理はどうなっているのか気になった。調べてみると、国際的なルールのあることが分かった。

陸から12マイル以上離れた海域で生ゴミ(排泄物も含む)の海洋投棄が可能。25マイル以上離れた海域ではプラスチック以外の全てのゴミの投棄が可能。我々の船では焼却炉で燃やして灰にして陸で降ろすことになっていた。

環境問題が気になったついでには是非とも触れておきたいことがある。

アマゾンや東南アジアの熱帯雨林が消失の危機に瀕しているのは周知のことである。熱帯雨林が日常恩恵を受けている製品、ときには地球にやさしいとエコマークを付して売られている商品までもが環境破壊に関わっているという事実はあまり知られていない。フイリピン、タイの熱帯雨林は既に消滅、マレーシアは破壊続行中、バブアニューギニア、

開発という名の破壊 熱帯雨林 消滅の危機

風の会会員 若狭谷 好一



ソロモンにも開発と言う名の破壊の手が伸びているといわれる。ブルネイと国境を接しているマレーシアのサラワク州も長く森林伐採が続いてきた地域で現在も進行中である。伐採された木材は日本にも大量に輸出されている。

ム油を原材料としている。伐採で切り出されるのは太くて大きな木だけであり伐採が終れば、長い年月をかけてではあるが、破壊された森はもとに戻る。しかし、プランテーションは違う。

アブラヤシは、収穫してから24時間以内でないと良質の油が採れないため製油工場を中心として、広大なプランテーション(最低でも1500ha)がつくられる。そのために、森の木々は根こそぎに焼き払われ動物たちも全て姿を消してしまう。

ソンの犠牲になっている。椰子の果実からパーム油がとれる。パーム油は年中安定した生産が見込める上、収穫率も高く、マレーシアの代表的な輸出品のひとつ。そしてその最大の消費国は日本。マレーシア、インドネシア、ボネトチップ、インスタントラーメン、口紅などの化粧品そして地球にやさしいというエコマーク付きのせっけんや洗剤、シャンプーまでもがパ

れた住民は、そこで働くか、都市へ移住するしかない。プランテーションでの労働賃金は安い。その上大量に使う農業による健康被害も深刻な問題だといえる。広大なプランテーションで学校に行くことも出来ず工場に縛り付けられ労働に追われる人々。これを緑の監獄と例える人もいる。

私引越し期の お引越し屋さん

さい期のお引越し。それは死を迎えると言う事です。

人は誰もオギヤツと産声をあげると同時に死を拒む事は出来ません。それは貧富や頭脳構造、容姿の優劣に全く関係なく、ならば死を自分から排除するということ無意味な努力は止めて開きなおってみては如何でしょうか。

この道に関心を抱いたのは、十数年前、父が旅立った時でした。父はもちろんのこと、母をはじめ家族の誰も「転居の準備」をしていませんでした。その結果葬儀社とお寺の企みを知る由もなかったのです(ちよととオーパー)かな)。トランプルが続きました。

何故こんな事になったのかと遺骨を抱きながら考えました。そして、悪いのは葬儀社やお寺だけではなく、何の準備もせずに、あの世に旅立った父や私たちに責任があるのだと気がつきました。若くとも明日ある。

◆「華影」は電話による安否確認やイザというときのカルテづくりなど、非日常の出来ごとで困惑するお葬式を生前にサポートする特定非営利活動団体。

◆連絡先は
大阪市中央区船場2-4-7
TEL 06-6941-3314
(21時間対応)